

第75回ゴールデングローブ賞、第70回カンヌ国際映画祭、それぞれで賞を受賞した話題作が4月14日(土)より公開される。  
監督・脚本のファティ・アキンが実際に起きた連続テロ殺人事件に  
触発されて描き出し、ダイアン・クルーガーが突然家族を失った悲しみと苦しみ、  
そのヒリヒリとした痛みまでも見る人に突きつける。  
作家・高橋源一郎さんは、この映画をどう見たのだろうか。



# 女は二度決断する

## 深い悲しみと憎しみの先に 人間が見いだせる希望のはかり

作家 高橋源一郎さん

### 単に「面白い」では語れない 心揺さぶられる作品

この映画は2000年から07年の間に実際にドイツで起きた「NSU事件」と呼ばれる連続テロ事件が下地になっています。現実性と物語を絶妙に織り交ぜながら、弁護士同士の張り詰めたやりとりが際立つ裁判シーンなど、サスペンスの要素も迫力たっぷり。しかし、単純に「面白かった」では済まされない、心が揺さぶられる作品です。作品の冒頭からラストまで、夫と子どもをテロで失ったヒロインを圧倒的に鮮やかに表現したダイアン・クルーガーの演技に魅了されました。

舞台はドイツ、ハンブルク。主人公カティヤはトルコ系移民のヌーリと結婚し、息子のロッコと三人で幸せな日常を送っています。そんなある日、手製の爆弾を使った爆弾テロによって、夫と子どもという最愛の家族を失ったカティヤは、悲しみのどん底に。犯人と目される人物が捕まり、彼女は絶望の淵から這い上がるべく、強い意志を持って裁判に臨みます。ところが容疑者の弁護士は、被害者であるヌー

リの前科や周辺の人間関係ばかりを取り沙汰し、カティヤの証言にも信憑性がないと言いつつ放つのです。

法で人を裁くことは、社会が決めたルールにのっとり、社会の正義として刑を執行することです。社会が犯人を裁くことが不可能だとわかったとき、個人の正義を振りかざしてそれを貫くべきなのか――。カティヤの悲しみと怒りは、心に突き刺さるヒリヒリとした痛みとともに「復讐はしてもいいものか」「報復を受けるべきは誰なのか」「自分ならどうするか」と私たちに問いかけてきます。

### 不寛容と否定性の連鎖を 断ち切る一筋の光

テロリズムは、人の身体だけでなく魂も殺します。負の感情を増幅させて幸せな日々や美しい景色を忘れさせ、人をネガティブな感情の囚人にするのもテロリズムの目的です。社会の正義で犯人を罰

することができないとわかったとき、カティヤは悲しみと憎しみ、怒りに突き動かされて行動します。しかし彼女は、自分の目的がテロリストと同等で、それを

実行すれば夫と息子の死への冒瀆になると気づくのです。傷つけられたら、同じ痛みを相手に与えたい。でも攻撃しても奪われた命は戻らないし、傷も癒えない。当たり前の論理ですが、それを意識するのは難しく、ネガティブな感情に支配された魂は盲目です。テロという負の連鎖が終わらないのはそのためでしょう。

ラスト、カティヤが下す決断は正しくはないかもしれませんが、けれど、負の感情だけに支配された行動とも違います。彼女は人が本来持つべき、心のはかりに「復讐」を乗せ、もう片方に何を乗せれば天秤が釣り合うかを考えて自らの行動に責任を負ったのです。彼女が乗せたものの重みは、赦しと同じくらいの意味があると私には思えました。どうしたら憎しみの連鎖を断ち切れるのか――。その問いへの一つの答えが提示された気がします。テロという現代社会の深い闇の中にかすかな光を見いだすためには、心の中に繊細に揺れるはかりを持つことだと、この作品は気づかせてくれるのです。(談)

たかはしけんいちろう / 1959年生まれ 作家、文芸評論家、明治学院大学教授。81年、『さようなら、ギャンクたち』でデビュー。近著に『魂のやいば』(岩波新書)、『ぼくたちはの国をこんなふうに変えることに決めた』(集英社新書)など。

## STORY

カティヤは、トルコ移民の夫ヌーリと息子のロッコと三人で幸せな日常を送っていた。しかしある日、ヌーリの事務所の前で白昼に爆弾が爆発し、ヌーリとロッコが犠牲に。幸せとこれまでの人生を一瞬にして奪われたカティヤ。理不尽な裁判はさらに心の傷を広げていく。深い絶望と悲しみの中、愛する家族と自分のために、彼女が下す決断とは。

